



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

霧が覆い隠すシッキム王国の“神秘” (6)

「わたしはアナタさまをリスペクトします！」の「アナタさま」は、哲学の問題であると前号で述べたが、われわれ人間の本質にかかわることである。それを象徴的に表現したのが、11歳のアヌルッダ君が大声で唱えるマントラである。通常マントラは、神さまの名前や仏を賛迎したりする短いことばである。また真言「オウム」などのように無想無形を対象とするものもある。いずれも繰り返し唱えていると内に向い心を静める効果ある。

ところがアヌルッダ君のマントラはそれらとは異なるようである。唱える対象を、われわれ人間の「身体」としているところである。もちろんこのマントラは総体的、複合的、一元論的なので、例えば仏像に向かうこともあるし、虚空に向かうこともある。ご先祖さまにむかうこともあるし、現世利益に向かうこともある。しかし、肝心なことは「アナタさま」がどこにおわすか、ということである。

路傍のお地蔵さまにおわすかもしれないが、未完のわが輩は「そこにもいるよ！」と断言できる確信はない。しかしわが輩の読者諸氏の「身体」には、必ず「アナタさま」がおわすと信じている。もちろんわが輩の身体にもおわす。われら人間は、「身体」を通してのみ「アナタさま」を知ることができる限定的な存在である。

なぜ、アヌルッダ君はいつも大声で唱えているのか。いつかマントラの秘密を体感的に解き明かしてみたい。

このマントラをアヌルッダ君に伝授したのは誰か。この仏塔を建立したお上人である。かつては同じヒッピー仲間であった。スリランカのスリーパーダ（仏足山）の仏塔工事現場で出会った。うす暗い一室に十名程の仲間がいて、一番奥にわが輩の寝床があった。誰かがわが輩を「牢名主みたい」といった。尻軽者のわが輩はすぐに脱走したが、お上人は寡黙で実直に忍耐強く仏道を歩まれた。人生の岐路は、たいていは若いころに決まる。

ダージリン（2000m）の宿はヴィラ・エベレスト（Vila Everest）である。仏塔に近いホテルを紹介してもらった。英国風の邸宅（1904年建造）をホテルに改築した建物である。博物館のようなホテルで、従業員の対応は素朴で親切であった。階段を上がると軋む音が足元から伝わってくるが、それがまた心地よい響きとなり歴史を体感しているようである。

ここで少しダージリンの発展史を述べておこう。

英国は 18 世紀中ごろよりインド植民地支配を推し進めていた。その先陣となったのが東インド会社である。インド駐在はストレスが多い。今日なら日本食に不便を感じることもないし、日本とのコミュニケーションはスマホやメール等で簡単にできる。航空運賃も安くなった。数十年前より数段にストレスは軽減されている。かつての駐在員のストレス解消法は、英国人ならゴルフに興じること、日本人ならマージャンであった。「マージャンばかりして仕事をサボっている！」と憤慨して本社に直訴した自由旅行者がいた。何の重圧もない自由人の越権行為だとわが輩は思った。

35 度を越えると野外でゴルフをすることも、扇風機の下でマージャンに興じること苦痛になる。霧の都ロンドンから渡航してきた東インド会社駐在員はどうしたか。

上司たちは施設の整った南アフリカやオーストラリアに、あるいは英国に一時帰国した。下級の者はヒル・ステーションと呼ばれる高原避暑地で暑さを凌いだ。ところが、カルカッタの駐在員には近くに適当な避暑地がなかった。そこで会社は、北ベンガルのマルダ地区の知事 (Commercial Resident) であり探検家でもあった J. W. グラント (Grant) の勧めで、ドルジリン (Dorje-ling) を開発するようになった。1829 年 G. W. ロイド (Lyoyd) 大尉を派遣調査させた。ロイドはシッキム国王と折衝し、1837 年に開拓を開始した。1839 年の人口は 100 人程であったが、避暑のための別荘建築が盛んになり人口が徐々に増えていった。われらが泊まったヴィラ・エベレストは、約 65 年後に別荘として建築された一つであった。

開発責任者キャンプベル地区長官 (D. A. Campbell) が 23 年間開発指揮をとった。彼は紅茶栽培に尽力したので、1860 年代以降生産が飛躍的に伸び、茶園労働者としてネパールから移住する者がふえてきた。現在は 12 万人ほどの人口になった。

実はアヌルッダ君家族はネパール人である。ダージリン (ベンガル州) で使用されている公用語は、ベンガル語とネパール語である。ネパール人が多数派といってもよい。それなのにベンガル語を必修科目にするというベンガル州政府の方針に抵抗してストライキが行われた。ベンガル人とネパール人とは文化も顔付きも違う。それだからというわけではないが、40 年程前からベンガル州から分離する「ゴルカーランド州」の運動がたびたびおこり、ツーリストが足止めをくらったことがあった。(注)通称はグルカ。現ネパール王国のこと。

超老舗ウィンダミア・ホテル前 (1939 年) の広場チョーラスタには、黄金の立像がある。ネパールの国民的詩人バーヌ・バクタ・アーチャリヤ (1861-1941) の像である。叙事詩『ラーマーヤナ物語』をネパール語に翻訳した。彼はネパールのタゴールとも呼ばれている。タゴールはベンガル人だが、バーヌはネパール人で、「ゴルカーランド州」分離の象徴を暗示するかのようになら立っている。

以前に来たときは、黄金像はなかったように思うが・・・。

建立趣意書をみると、1949 年 6 月 17 日に立像されたものをネパリー・サーヒティア (協会) ・サンメーラン (連合) が 1996 年 7 月 13 日に再立像したとある。

わが輩の記憶がボケているのか、それとも銅像を黄金像に塗り替えたのか、今一分らないが、とにかく今回は金ピカの印象が強く残った。

次号は、元シッキム王国に至る途中のカリンポン (ベンガル州) に立ち寄り、わが輩の主要目的地であるマル秘の場所とタゴールの別荘についての疑問を辿ってみよう。